

### 幼児期に厳しい躰けを

畑の麦苗を強く育てるために欠かせない、大切な仕事の一つに“麦踏”があります。冬の寒い風が吹きぬけていく中で黙々と、一株一株ていねいに麦を踏み続けるお百姓さんの姿は、まことに尊いものだと思います。麦は、強く踏みつけられれば踏みつけられるほど、根をしっかりと土の中に張り、大粒の麦を豊かにつけた穂を、立派に稔らせることが出来るようになるのです。

もしもこの麦踏みを怠りますと、寒さにあえば一ぺんにしおれてしまい、稔りの時には穂の重さを支えることが出来ずに倒れてしまいます。だから、麦踏みは、どうしても欠かせない大事な仕事なのです。ここでは、この麦踏みに当たる教育について考えてみたいと思います。

麦踏みは、人間として生きていくために必要な基礎的良習慣をつける、厳しい躰教育に当たるかと思えます。麦踏みが、苗の若い時期に行なうべきものであって、成長してからではかえって有害になるように、厳しい躰教育も、幼児期の間に行なって初めて有益なのであって、少・青年期ではかえって有害になる、ということをお教えます。

ところが、わが国の多くの家庭では、幼児期にはわがままいっぱい放任しておき、大きくなるに従って厳しくする、ということが多いようです。過日、親に叱責された20歳の青年が親を殺す、という事件がありました。叱責の時期が遅すぎるとこんな事件をひき起こしても決

して不思議ではありません。

叱責そのものは大切なもので、欠くことの出来ないものです。幼児の行為が、どんなに悪いことであるかを幼児に理解させるのにはぜひ必要なものです。幼児に説教しても、言葉の理解力に乏しい幼児には理解できません。それよりも、ひどく悪い行為に対してはひどく叱り、それほどでもない行為に対しては軽く叱る。その方が幼児には悪いことの程度がよく理解できるのです。

しかし、少・青年期へと成長していくにつれて理解力が増しますので、叱責よりも説教の方が有効になっていきます。しかしその説教も、有効なのはせいぜい中学生までです。それ以後は、効果がないというよりも、有害です。

昔、古老のお百姓から「彼岸過ぎの肥料と20歳過ぎの説教は為にならぬ」という言葉を聞いたことがあります。最初に施す元肥に対して、あとから施す肥料を追肥と言います。追肥は良い作物を収穫するためにぜひ必要なものですが、時期が遅いと逆に有害なことは説教と同じだ、ということです。何でも時期が肝腎ですね。

叱責されたのを恨みに思って親を殺す、というのは話にもならないあきれた行為です。しかし、そういうあきれた行為を生むほどに時期を失った叱責というものの恐ろしいことを、人の子の親たる者はよく心得ておく必要がある、と思います。